

松 山 大 学 論 集
第 22 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 1 0 年 12 月 発 行

『シャーリー』は本当に失敗作か
—— シャーロット・ブロンテの社会問題に対する姿勢(1) ——

新 井 英 夫

『シャーリー』は本当に失敗作か

—— シャーロット・ブロンテの社会問題に対する姿勢⁽¹⁾ ——

新 井 英 夫

I

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) の代表作『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847) は、1847年10月16日に、スミス・エルダー社 (Smith, Elder and Company) から出版されると瞬く間にベスト・セラーとなり、出版から僅か6ヶ月の間に第3版まで版を重ね、ジェイン・エア・フィーバーと呼ばれる一大ブームを巻き起こすまでの人気となった¹⁾。そして約160年を経た現在でも、『ジェイン・エア』は、イギリス国民が愛する小説として、その人気は未だ衰えていない²⁾。このような『ジェイン・エア』の華々しい成功を受けて、スミス・エルダー社がシャーロットにすぐに次の作品を書かせようと促したのは出版社として当然のことであった。

当時、スミス・エルダー社の出版顧問を務めていた W. S. ウィリアムズ (W. S. Williams, 1800-1875) は、『ジェイン・エア』の出版直後から早く次の小説の執筆に取りかかるように催促している。1847年12月14日付のウィリアムズ宛の手紙において、シャーロットは連載小説を執筆してはどうかというウィリアムズの提案を断り、『教授』 (*The Professor*, 1857) を書き直すことを宣言している³⁾。この手紙からも明らかのように、シャーロットはこの時点では『ジェイン・エア』と同じように、自分の自叙伝的要素と、満たされることのなかった個人的願望を吐露する小説を書こうと考えていたようである。しかしシャーロットはこの方針を大きく転換することになる。それは1848年に入り、

『ジェイン・エア』に対する厳しい批評が続出したことに大きな要因がある。『ジェイン・エア』批判は、1848年12月に『クォーターリー・レビュー』(Quarterly Review)誌上でエリザベス・リグビー(Elizabeth Rigby, 1809-1893)が匿名で執筆した『ジェイン・エア』評に始まる。このなかでリグビーは、作品の持つ女性らしからぬ野蛮さと粗雑さを酷評している。

Jane Eyre, in spite of some grand things about her, is a being totally uncongenial to our feelings from beginning to end. . . . the impression she leaves on our mind is that of decidedly vulgar-minded woman – one whom we should not care for as an acquaintance, whom we should not seek as a friend, whom we should not desire for a relation, and whom we should scrupulously avoid for a governess. . . . if we ascribe the book to a woman at all, we have no alternative but to ascribe it to one who has, for some sufficient reason, long forfeited the society of her own sex.⁴⁾

リグビーによるジェインへの攻撃、そして「女性らしくない」という批判が『ジェイン・エア』に大きなダメージを与えることになった。それはヴィクトリア朝では女王の潔癖な性格を反映して道徳や規律が重んじられ、特に女性は「家庭内天使」(the Angel in the House)と呼ばれて慎ましく従順であることが美德とされていたからである。リグビーは一般にも深く浸透していた当時の女性観を盾に取り、『ジェイン・エア』を批判したのである。さらにシャーロットは、尊敬する G. H. ルイス (George Henry Lewes, 1817-1878) に『ジェイン・エア』のメロドラマ性を指摘⁵⁾されたことを深刻に受け止めている。

You warn me to beware of melodrama, and you exhort me to adhere to the real. When I first began to write, so impressed was I with the truth of the principles you advocate, that I determined to take Nature and Truth as my sole

guides, and to follow to their very footprints; I restrained imagination, eschewed romance, repressed excitement; over-bright colouring, too, I avoided, and sought to produce something which should be soft, grave, and true.⁶⁾

このシャーロットの決意は『教授』に対するものであるが、出版社の理解を得られず『教授』の改作を断念した彼女は、この「想像力を抑制し、ロマンスを控え、興奮を鎮めた」小説を執筆する決意を次作『シャーリー』(Shirley, 1849)において実行に移すのである。

シャーロットが『シャーリー』の執筆を始めた1848年は、フランスで二月革命(February Revolution)が起こり、ドイツやオーストリアに広がりを見せる一方、イギリスではチャーチスト運動(Charlist Movement)が活発化していた。シャーロットがこのような事件に対して大きな関心を抱いていたことは、当時の彼女の手紙から読み取ることができる⁷⁾。またほかの作家たちも進んでこの種の事件を取り上げ、「イギリス状況小説」(the condition of England Novels)と呼ばれる当時の社会問題を扱った小説を多く書いている。ベンジャミン・デズレイリ(Benjamin Disraeli, 1804-1881)の『コニングズビー』(Conningsby, 1844), 『シビル』(Sybil, 1845), 『タンクリッド』(Tancred, 1847), エリザベス・ギヤスケル(Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-1865)の『メアリー・バートン』(Mary Barton, 1848)や『北と南』(North and South, 1855), チャールズ・キングズリー(Charles Kingsley, 1819-1875)の『イースト』(Yeast, 1848)や『オートン・ロック』(Auton Locke, 1850), チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-1870)の『ハード・タイムズ』(Hard Times, 1854), ジョージ・エリオット(George Eliot, 1819-1880)の『フェリックス・ホルト』(Felix Holt, 1866)などがその代表作である。新しい手法を模索していたシャーロットが、このような社会的なテーマを扱った小説に刺激を受け、自らも社会問題を主題とした小説を書こうと決意したことは、自然の流れだったのかもしれない。

『シャーリー』の冒頭に書かれた読者へのメッセージには、前作『ジェイン・

エア』との違いが高らかに宣言されている。

If you think, from this prelude, that anything like a romance is preparing for you, reader, you never were more mistaken. Do you anticipate sentiment, and poetry, and reverie? Do you expect passion, and stimulus, and melodrama? Calm your expectations; reduce them to a lowly standard. Something real, cool and solid lies before you; something unromantic as Monday morning, when all who have work wake with the consciousness that they must rise and betake themselves thereto.⁸⁾

この書き出しは作者が『ジェイン・エア』のなかにあった情熱的でロマンチックな要素、シンデレラ物語的なハッピー・エンディングに対する読者の期待が、この作品のなかでは実現しないことを告げ、それを明確にしておくことを目的とするとともに、作者自身の新たな境地に乗り出す決意が込められている。ルイスに宛てた手紙と酷似したこの冒頭の一節は、『ジェイン・エア』との決別宣言とも解釈することができる。『シャーリー』には教会制度をめぐる問題、労働問題、女性問題など多岐にわたる社会問題が取り上げられ、前作とは異なる趣をもった小説に仕上がっている。さらにこうした主題を扱うために、シャーロットはこれまで用いてきた一人称叙述という語り的手法を捨て、リアリズムを基調としたサッカー（William Makepeace Thackeray, 1811-1863）流の全知的話法を採り入れている。

このように作家としての新境地を切り開いたシャーロットであるが、『シャーリー』は出版当初から前作『ジェイン・エア』と比較され、批判される傾向にあった⁹⁾。さらに人間を社会的側面から捉えるようにシャーロットに忠告した G. H. ルイスまでも、『シャーリー』の小説における統一性の欠如について厳しく指摘している。

The unity of *Jane Eyre* in spite of its clumsy and improbable contrivances was great and effective: the fire of one passion fused the discordant materials into one mould. But in *Shirley* all unity, in consequence of defective art, is wanting. . . . The book may be laid down at any chapter, and almost any chapter might be omitted. . . . Again we say that *Shirley* cannot be received as a work of art. It is not a picture; but a portfolio of random sketches for one or more pictures. The authoress never seems distinctly to have made up her mind as to what she was to do; whether to describe the habits and manners of Yorkshire and its social aspects in the days of King Lud, or to paint a character, or to tell a love story. All are by turns attempted and abandoned; and the book consequently moves slowly, and by starts – leaving behind it no distinct or satisfactory impression.¹⁰⁾

このように批判の大部分は、皮肉なことに『シャーリー』があまりにも多岐にわたる社会問題を取り上げすぎているため、まとまりがなく、小説としての統一を欠いているというものであった。確かに『シャーリー』には、一つの問題が提起されたかと思うと、その問題が解決されぬまま別の問題へと話題が移り、読者を消化不良に陥らせる傾向が見られる。もちろんこの小説の統一性を主張する批評家¹¹⁾もいるが、後に述べるようにやはり最終的にはルイスの指摘を否定することは困難であろう。シャーロットが『シャーリー』で初めて掲げた労働問題というテーマが、彼女の筆に馴染まなかったこと、また彼女自身の女性の生き方に対する考えが不徹底であったことに要因があるのかもしれない。しかしこの小説は題材の上でもその扱い方の上でも、シャーロットにとって非常に野心的な作品であったことは間違いない。自分をサッカーやディケンズと比較し、世間についての知識が自分に欠けていることを強く認識していたシャーロット¹²⁾は、『シャーリー』の執筆にあたり『マーキュリーズ』(*Mercuries*) 紙¹³⁾を取り寄せ、作品の舞台となる時代の状況を詳しく調べるな

ど、『教授』や『ジェイン・エア』の執筆では見せなかった新たな試みに積極的に挑戦している。我々は、単に『シャーリー』に失敗作としての烙印を押すのではなく、この点をきちんと評価すべきではないだろうか。

そもそも『シャーリー』の執筆は、シャーロットの生涯で最も不幸な時期と重なり、彼女が執筆に集中することができない状況にあったことを斟酌すべきであろう。『シャーリー』を書き始めたとき、弟妹はみんな元気で、いつもと変わらぬブロンテ家の生活があった。しかし『シャーリー』を書き終わった時には、72歳の老いた父親パトリック（Patrick Brontë, 1777-1861）を除いてシャーロットは家族を全て失い、完全な孤独状態に陥るのである。

1848年9月24日、アルコール依存症と阿片中毒のために廃人同様の状態になっていた弟ブランウェル（Branwell Brontë, 1817-1848）が急死する。そのブランウェルの葬儀のときに風邪をひいたことがきっかけで、妹エミリ（Emily Brontë, 1818-1848）は急性の肺結核の症状を示し、1848年12月22日に亡くなってしまふ。エミリの死は、道徳的に最後まで許すことができなかったブランウェルのときとは異なり、シャーロットに大きな衝撃を与えた。

It was almost easier to bear up when the trial was at its crisis than now – The feeling of Emily's loss does not diminish as time wears on – it often makes itself most acutely recognized – It brings too an inexpressible sorrow with it, and then the future is dark.¹⁴⁾

しかし「エミリを失ったとき試練の盃を一滴残らず飲みほしたと思っていた」¹⁵⁾シャーロットにはまだ飲むべき苦杯が残されていた。今度は末妹アン（Anne Brontë, 1820-1849）が見る見るうちに衰弱していったのである。アンはヨークシャー東海岸のスカーパーバラ（Scarborough）で転地療養するもののそれもむなしく1849年5月28日に肺結核を患い、息を引き取ってしまう。

1年もたたないうちにブランウェル、エミリ、アンが亡くなるという悲劇を

味わったシャーロットは、悲しみと孤独と闘うために仕事に没頭し、『シャーリー』を8月には完成させ、スミス・エルダー社に送っている。エリザベス・ギヤスケルは、シャーロットはブランウエルの死までに、『シャーリー』の約3分の2を書きあげ、残りの3分の1は、妹弟が全て亡くなった後に書かれたものであると指摘している¹⁶⁾。シャーロットが再びペンを執った最初の章である第24章が「死の影の谷」(“The Valley of the Shadow of Death”)と名付けられたことは、何によりも彼女が悲劇的な環境に身を置いていたことを象徴している。

このようなシャーロットの心理状態が、これまで『シャーリー』の統一性の欠如に少なからぬ影響を与えたと考えられてきた。例えばキャロライン・ヘルストーン (Caroline Helstone) の瞳の色は第1, 2巻を通じて茶色であるにもかかわらず、第2巻の最終章以降、青色に描かれていることがよく指摘される。シャーロットは、キャロラインのモデルとして当初、茶色の瞳を持つ友人エレン・ナッシー (Ellen Nussey, 1817-1897) を考えていたが、アンが倒れたことをきっかけにモデルの変更を行い、青色の瞳を持つアンをキャロラインに投影したのである。またストーリーも当初、キャロラインは作中の孤独な老女マン (Miss Mann) やエインリー (Miss Ainley) と同じ道を辿り、最終的に独身であっても、社会的に有益な活動と、実母プライア夫人 (Mrs Pryor) の出現を通じて得られる家庭の愛と平和のうちに生きる慰めを見出すことになるはずであった。しかしキャロラインにアンを投影したことにより、シャーロットは作中だけでも妹に幸せを味わわせたいと思うようになり、キャロラインとロバート・ムア (Robert Gérard Moore) の結婚というハッピー・エンディングを用意し、ストーリーの変更を行ったのである¹⁷⁾。

このように創作途中に何度も弟妹の死に直面し、最初の小説構想に集中できず、シャーロットの執筆が大いに乱されたことは確かである。しかしながらこれが『シャーリー』の構成を歪めたという客観的事実にはならない。『シャーリー』の草稿は、『ジェイン・エア』のものよりも削除や加筆修正が多く、そ

のほとんどが語句や、登場人物の思考内容などによるものであり、プロットの変更を示すようなものはない¹⁸⁾。このような客観的事実から、現行のテキストにみられる構成上の不統一は、最初からシャーロットが意図したものであると考えられる。これまで指摘されてきた『シャーリー』の欠点と思われる箇所にこそシャーロット・ブロンテの狙いが隠されているのではないだろうか。

このような観点から論じることによって、G. H. ルイスの『シャーリー』評以来、160年もの長きにわたり固定されてきた「失敗作」という烙印から、本小説を解放することができるかもしれない。

II

『シャーリー』は1849年に出版され、チャーチスト運動が最高潮にあった「飢餓の40年代」(Hungry Forties) 後半に書かれている。チャーチスト運動が活発化する不穏な空気の中、シャーロット・ブロンテは政情不安について、恩師マーガレット・ウラー (Margaret Wooler, 1792-1885) 宛の手紙に、次のような懸念を示している。

As little doubt have I that convulsive revolutions put back the world in all that is good, check civilization, bring the dregs of society to its surface, in short, it appears to me that insurrections and battles are the acute diseases of nations, and that their tendency is to exhaust by their violence the vital energies of the countries where they occur. That England may be spared the spasms, cramps, and frenzy-fits now contorting the Continent and threatening Ireland, I earnestly pray!¹⁹⁾

シャーロットが国教会の牧師の娘であったことを考え合わせると、革命に対して恐怖を抱くことは当然のことであろう。この手紙では、革命は国の「病氣」であり、国から活力を奪い去るものと捉えている。しかし、このような懸念を

表明する一方で、シャーロットはチャーチストの苦境にも同情を寄せている。

Their [Chartists'] grievances should not indeed be neglected, nor the existence of their sufferings ignored. It would now be the right time, when an ill-advised movement has been judiciously repressed, to examine carefully into their causes of complaint, and make such concessions as justice and humanity dictate. If Government would act so, how much good might be done by the removal of ill-feeling and the substitution of mutual kindness in its place!²⁰⁾

チャーチスト運動が盛り上がり、急進的な労働運動によって社会体制が脅かされるのではないかという不安がイギリス社会全体に広がっていた1848年において、シャーロットも例外ではなく、社会状況に関心を持ち、革命を恐れている。シャーロットはチャーチストたちの苦境を無視すべきではなく、彼らの不満の原因を調べてみる必要があるだと主張している。『シャーリー』の執筆において、シャーロットはその原因を調べ、革命を起こすことなく、労働者の苦境を改善する方策を導き出す必要に迫られているのである。

しかしながらシャーロットは、『シャーリー』の舞台をこの時代に設定しなかった。彼女は社会変革の手段として選挙権を求めていたチャーチスト運動を利用するのではなく、35年以上前にウエスト・ライディング (West Riding) 地方で起こったラダイト騒乱 (Luddite Riots) を利用し、その時代を『シャーリー』の舞台に据えるのである。自分たちが職を失ったのは新しい機械のせいであるとして労働者たちが工場を襲い、機械を破壊していた暴力的な時代を振り返っているのである。シャーロットは現在進行中で行方も定かではない問題を扱うよりも、全体像を捉えることのできる1810年代の問題を扱い、そこから不穏な社会状況を解決する方策を小説のなかで探ろうとしたのである²¹⁾

ロバート・ムアの工場襲撃を頂点とする『シャーリー』における暴力事件は、ナポレオン戦争 (The Napoleonic Wars, 1803-1815) によってもたらされた国際

状況という、経済的なコンテクストに据えられているため、事件の原因が何であるのかが、小説のなかで明確に示されている。当時はナポレオン戦争中であり、羊毛産業貿易は大きな痛手を受けていた²⁹⁾ 第2章では貿易がどうして不振になったのかについて詳しい説明がなされ、悲惨な戦争からどうして労働者が惨めにならざるを得なかったのか、まるで歴史書のようにその出来事を一つ一つ取り上げ、説明しながら物語が進行している。語り手はフランスの大陸封鎖政策（Continental System, 1806-1814）に対抗して中立国がフランスと通商することを禁止した枢密院令（Orders in Council, 1807）をイギリスが発動したことを明らかにし、その影響について「これはアメリカの怒りを買う事態を招き、これによってヨークシャーの羊毛貿易はその主要市場から切り離されることになり、その結果羊毛貿易は破滅の淵に立たされる事態に立ち至った。小さな外国市場は供給過剰の状態になって、これ以上受け入れようとしなくなった」（29）と説明している。市場がこのように停滞したために、「新発明の機械が北部の主要生産工場に導入され、必要な雇用人員数を大幅に削減することになったため、何千もの労働者が職を失い、生活を維持する正当な手段を奪われる羽目に陥った」（29）のである。苦境は最高潮に達し、人々の忍耐力も限界を超え、ついに暴動と化してしまう。このように小説の始まりでは、作者の目が広く外の世界に向けられ、労働者の切迫した状況と、労働者と経営者の対立を軸とした社会小説のプロットが描かれている。しかしながら小説が進むにつれ、それは次第に薄れていく。確かに工場に押し掛けた労働者たちとロバートが対峙する場面（第8章）や、工場への夜襲の場面（第19章）は描かれるものの、それは小説の筋の一部にすぎず、話題はキャロラインとプライア夫人の母子関係や、シャーリー・キールダー（Shirley Keelder）とルイ・ムア（Louis Gérard Moore）の恋愛をめぐる物語に移ってってしまうのである。

そもそも『シャーリー』は労働問題を主題にしながら、主要登場人物であるシャーリー、キャロライン、ロバート、ルイの4人が何れも労働者として設定されていないことは注目に値する。『シャーリー』の語り手は、三人称であり

ながら、決して客観的な語り手ではなく、むしろ彼らに焦点化した視点から物語を語っている。つまり、彼らの心のなかに自由に入ることができ、彼らの考えや気持ちを言葉で表す語りなのである。それゆえ彼らの知らない労働者たちの姿は常に抽象的に描かれることになる。例えば、ロバートによって解雇された工場労働者ウィリアム・ファレン (William Farren) が家に戻ったときの描写を見てみたい。

Farren, as he went home to his cottage – once, in better times, a decent, clean, pleasant place, but now, though still clean, very dreary, because so poor. . . . On his entrance his wife served out, in orderly sort, such dinner as she had to give him and the bairns. It was only porridge, and too little of that. Some of the younger children asked for more when they had done their portion – an application which disturbed William much. While his wife quieted them as well as she could, he left his seat and went to the door. He whistled a cheery stave, which did not, however, prevent a broad drop or two. . . . (134)

これは状況小説における貧民生活の典型的な一齣にすぎず、しかも非常に短いものである。『シャーリー』には、エリザベス・ギヤスケルが『メアリー・バートン』のなかで描いたような読者に迫るリアリティー溢れる労働者の姿は描かれていない。シャーロットは自ら都市に住む労働者たちの生活に不案内だと述べている²³⁾ように、労働者の実態をほとんど知らないで書いているのである。それゆえこの小説では、労働問題を主題にしなが、主要登場人物が一人も労働者に設定されないばかりか、労働者は姿すら見せず、リアリティーに欠ける描写となってしまっているのである。

小説冒頭、ロバートの工場に搬入される予定の剪断機が運ばれる途中、何者かによってそれが打ち壊される事件が起こる。この事件の犯人は、明らかに飢餓に苦しむ労働者とそれを扇動する者による行為である。したがって緊迫した

打ち壊しの場面や、労働者の怒りの声を描写することは物語にとって必要不可欠な要素といえるだろう。しかし搬入される予定の機械が襲われるかもしれないという情報は、事件とは無関係である副牧師たちが集まって酒を酌み交わす場面において、マシューソン・ヘルストン (Matthewson Helstone) 牧師によって初めて明らかにされる。そして剪断機の納品を待つ工場主ロバートは、「悪魔め。あれ、壊してやったぜ」(31) という声で剪断機が打ち壊しにあったことを初めて知るのである。事件の一方の当事者である労働者の姿は暗闇のなかで見えないままであり、読者に提示されるのは、襲撃の憂き目にあう犠牲者としての工場主の姿に限られているのである。

同様のことがロバートの工場が襲撃される事件にも当てはまる。モーゼズ・バラグラフ (Moses Barraclough) らの無政府主義的傾向をおびた運動家によって扇動された労働者たちによって、ロバートの工場は襲撃されるが、やはり事件の一方の当事者である労働者たちの姿は見えない。この事件は、キャロラインとシャーリーの視点から語られている。2人は労働者たちが工場に向かう姿を直接目にするのではなく、足音を耳にして異変に気づくのである。

The dog recommenced barking furiously; suddenly he stopped, and seemed to listen. The occupants of the dining-room listened too, and not merely now to the flow of the millstream: there was a nearer, though a muffled sound on the road below the churchyard; a measured, beating, approaching sound; a dull tramp of marching feet. It drew near. Those who listened by degrees comprehended its extent. It was not the tread of two, nor of a dozen, nor of a score of men: it was the tread of hundreds. They could see nothing. (318)

異変を感じて彼女たちは工場へ駆けつけるものの、女性であることから工場に近づくことすらできず、高台から工場を見下ろすことしかできなかったのである。工場襲撃の様子を、2人の視点から語り手は次のように描写している。

A crash – smash – shiver – stopped their whispers. A simultaneously-hurled volley of stones had saluted the broad front of the mill, with all its windows; and now every pane of every lattice lay in shattered and pounded fragments. A yell followed this demonstration – a rioters' yell – a North-of-England – a Yorkshire – a West-Riding – a West-Riding-clothing-district-of-Yorkshire rioters' yell. You never heard that sound, perhaps, reader? So much the better for your ears – perhaps for your heart; since, if it rends the air in hate to yourself, or to the men or principles you approve, the interests to which you wish well. Wrath wakens to the cry of Hate: the Lion shakes his mane, and rises to the howl of the Hyena: Caste stands up ireful against Caste; and the indignant, wronged spirit of the Middle Rank bears down in zeal and scorn on the famished and furious mass of the Operative class. It is difficult to be tolerant – difficult to be just – in such moments. (325)

語り手は「こんな叫び声はお聞きになったことがないだろう。聞かない方が耳のためにも、そしておそらくは心のためにもよい」と述べ、労働者の姿を描くどころか、声を語ることにすら拒絶している。労働者の姿が描かれるのは、夜が明けて騒ぎが鎮まった後のことであり、しかも犠牲となった労働者たちは一緒くたに扱われ、個別具体的な姿は語られない。

A human body lay quiet on its face near the gates; and five or six wounded men writhed and moaned in the bloody dust. (328)

小説の転換点となるロバート・ムアの暗殺未遂事件においても、暗殺場面や暗殺者は直接描かれず、語り手は読者に「鋭い銃声が夜の静けさを破った」(508)と音で事件を伝えるだけである。さらに結末において、ロバートは犯人がマイケル・ハートリー (Michael Hartley) であることを知っているにもかかわらず

わらず、彼を追跡し、逮捕し、適切な処罰を受けさせるという当然の行為すら実行に移さない。マイケル・ハートリーは事件後、読者に姿を見せることはなく、事件の1年後に譫妄症で死亡したことが伝えられる。オックスフォード版の編者であるマーガレット・スミス (Margaret Smith) が『シャーリー』を「暗闇の小説」(a novel of darkness)²⁴⁾ と称したように、まさに労働者の姿は全て暗闇に葬られており、我々読者にその姿を明らかにすることはしない。

暗闇に葬られているのは、労働者の姿だけではない。労働問題そのものが棚上げされ、解決策が示されることなく暗闇のなかに置き去りにされているのである。

小説の結末において、戦争がイギリス側に有利に展開し、枢密院令が撤回されて貿易が再開したことにより、労働者たちの苦境は改善される。破産を覚悟していたロバート自身も工場製品が輸出できる見込みが出たことで、希望を持つ。経済的不況が改善されたロバートは、キャロラインの助言を聞き入れ、「家のない人や、飢えた人や、失業した人を、遠くからも近くからも、谷間の工場に来させ、住宅を貸し、食物を割り与える」(606) ことを約束する。しかしそれはあくまでも工場の発展を前提にしたものであり、彼らの立場を考慮しての約束ではない。貧困が取り除かれ、全てが万事解決したかのように描かれているが、実は政治経済的な変化によって事態が好転し解決がもたらされただけであり、ロバートの積極的な行動による変化でも、労働者たちの働きかけによる変化でもないのである。つまり根本的な解決策は何も示されておらず、経営者と労働者の関係は不安定な状態のまま暗闇のなかで維持されているのである。最終的に語り手は物語から教訓を読み取ることを全て読者に任せ、自らが解決策を示すことを放棄してしまう。

The story is told. I think I now see the judicious reader putting on his spectacles to look for the moral. It would be an insult to his sagacity to offer directions. I only say, God speed him in the quest! (608)

このように『シャーリー』は、労働問題について明確な解答を提示せず、一見極めて無責任な形で幕を閉じているように感じられる。語り手は労働者の苦境を改善する産業の発展に対する評価も下さず、また経営者と労働者が和解をするための方策も最後まで示さない。『シャーリー』は労働問題を主題にしながら、小説中の主要な出来事が経営者側の視点に焦点化されて語られているため、読者は労働者の視点から物事を眺めることができない。そのため、労働者側との接点を築くことができず、語り手は何も解決策を導くことができないのである。しかしこれほど徹底的に労働者の姿が描かれなことは、逆説的に労働者の存在を浮き立たせることになる²⁵⁾。労働者の姿を描かず、何も語り手が解決策を提示せずに主要な問題を暗闇に葬ることで、作者シャーロット・ブロンテは、『シャーリー』において経営者と労働者の視点が決して交わらないことを読者に印象付けるとともに、そこにこの問題の核心があることを示そうとしたのではないだろうか。

註

- 1) シャーロットは、1848年4月20日付のスミス・エルダー社宛の書簡に、『ジェイン・エア』の第3版を受け取った旨を記している。Thomas James Wise and John Alexander Symington, eds., *The Brontës: Their Lives, Friendship Correspondence, 4 volumes* (Pennsylvania: Porcupine Press, 1980) II, 204.
- 2) 2007年3月1日のBBCニュース電子版によると、2,000人以上を対象に「イギリス国民がこれなくしては生きていけない本」(“the book the nation can't live without”)という調査を行ったところ、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』は14%の票を集めて第3位に入った<<http://news.bbc.co.uk/2/hi/entertainment/6405737.stm>>。さらに1990年代以降、『ジェイン・エア』の舞台化やテレビドラマ化が頻繁に行われている事実を考えると、現代においても『ジェイン・エア』の人気は疑いようがない。
- 3) Wise and Symington, II, 161-162.
- 4) Miriam Allott, ed. *The Brontës: The Critical Heritage* (London: Routledge, 2003) 109-110.
- 5) Allott, 85. 『ジェイン・エア』についてG. H. ルイスは、“There is, indeed, too much melodrama and improbability, which smack of the circulating- library, – we allude particularly to the mad wife and all that relates to her, and to the wanderings of Jane when she quits Thornfield; yet even those parts are powerfully executed”と指摘している。

- 6) Wise and Symington, II, 152.
- 7) Wise and Symington, II, 215.
- 8) Charlotte Brontë, *Shirley*, ed. Jessica Cox (London: Penguin, 2006) 7. 以後、本論文中の括弧内の数字は、このテキストの頁数を示すものとする。
- 9) Allott, 139. 1849年11月10日付の『ブリタニア』(*Britannia*)は、“We have the disagreeable feeling that much of the matter we are wading through is purposeless and had better have been omitted”と酷評している。
- 10) Allott, 163-165. ルイスの指摘はその後の『シャーリー』の小説としての一般的評価を代表している。Cf. Earl A. Knies, *The Art of Charlotte Brontë* (Athens: Ohio UP, 1969) 145. アール・A・ニースが言うように“Shirley is unanimously held to be the weakest of Charlotte Brontë’s three mature novels”のである。
- 11) Jacob Korg “The Problem of Unity in *Shirley*.” *The Brontë Sisters: Critical Assessments*, 4 volumes (Mountfield: Helm Information, 1996) vol. 3. コーグはこの小説はプロット上の統一ではなく、テーマの統一があると主張している。
- 12) Wise and Symington, II, 146, 151.
- 13) ホイッグ党的傾向の強い新聞で、ウエスト・ライディング地方ではよく読まれていた。
- 14) Wise and Symington, II, 316.
- 15) Wise and Symington, II, 301.
- 16) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, ed. Alan Shelston (Harmondsworth: Penguin, 1975) 379-380.
- 17) J. M. S. Tompkins, “Caroline Helstone’s Eyes,” *Brontë Society Transactions*, XIV (1961), quoted in Knies, 145. またジャネット・スペンス (Janet Spens) は、当初シャーリーがロバートと結婚し、失恋したキャロラインは自殺する計画であったと指摘している。Cf. Janet Spens, “Charlotte Brontë,” *Essays and Studies by Members of the English Association*, XIV (1929), quoted in Knies, 145.
- 18) Charlotte Brontë, *Shirley*, eds. Herbert Rosengarten and Margaret Smith (Oxford: Oxford UP, 1998) xxvi-xxix.
- 19) Wise and Symington, II, 202-203.
- 20) Wise and Symington, II, 203.
- 21) テリー・イーグルトンは『シャーリー』が書かれた1848年頃のイギリスの状況に、ラダイト騒乱の時代との類似性をシャーロットは見てとったために、この時代を舞台に選んだと指摘している。Cf. Terry Eagleton, *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës* (Macmillan, 1988) 45-47. シャーロットは同時代の状況小説を書く作家と比べて、世間についての知識が自分に欠けていることを強く認識していた。ギヤスケルの『メアリー・バートン』が出版されたとき、彼女は “In reading ‘Mary Barton’ (a clever though painful tale) I was a little dismayed to find myself in some measure anticipated both in subject and incident”

と述べている。シャーロットが過去に舞台を設定した理由の一つとして、当時の状況小説と一線を画したいという想いがあったのかもしれない。Cf. Wise and Symington, II, 305.

- 22) Patricia Ingham, *The Brontës* (Oxford: Oxford UP, 2006) 111.
 23) Wise and Symington, III, 207.
 24) Charlotte Brontë, *Shirley*, eds. Herbert Rosengarten and Margaret Smith (Oxford: Oxford UP, 1998) xv.
 25) テリー・イーグルトンも同様の指摘をしている。Cf. Terry Eagleton, 47.

参 考 文 献

- Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1994.
 Bentley, Phyllis. *The Brontës*. London: Home & Van Thal Ltd., 1947.
 Booth, Wayne C. *The Rhetoric of Fiction*. Chicago: Chicago UP, 1983.
 Bowen, Elizabeth. *English Novelists*. London: William Collins, 1942.
 Cecil, David. *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation*. Harmondsworth: Penguin, 1948.
 Ewbank, Inga-Stina. *Their Proper Sphere. A Study of the Brontë Sisters as Early Victorian Female Novelists*. London: Edward Arnold, 1966.
 Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton*. Ed. Macdonald Daly. London: Penguin, 2003.
 Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Women Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 2000.
 Gren, Heather. *Charlotte Brontë: The Imagination in History*. New York: Oxford UP, 2002.
 McNeese, Eleanor, ed. *The Brontë Sisters: Critical Assessments*. Vol. 3. Mountfield: Helm Information, 1996.
 Moglen, Helen. *Charlotte Brontë: The Self Conceived*. Madison: Wisconsin UP, 1984.
 Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*. New York: Simon & Schuster, 1993.
 Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Charlotte Brontë to Doris Lessing*. New York: Princeton UP, 1997.
 Spens, Janet. "Charlotte Brontë." *Essays and Studies by Members of the English Association*, XIV. 1929.
 Tompkins, J. M. S. "Caroline Helstone's Eyes." *Brontë Society Transactions*, XIV. 1961.
 Tromly, Annette. *The Cover of the Mask: the Autobiographers in Charlotte Brontë's Fiction*. Victoria, B. C.: English Literary Studies, Victoria UP, 1982.
 Williams, Merryn. *Women in the English Novel, 1800-1900*. London: Macmillan, 1984.

※本稿は2009（平成21）年度に交付を受けた松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。